

Nihon Ongaku Shudan (Pro Musica Nipponia)

# 日本音楽集団

第115回定期演奏会

1990年9月19日(水)PM6:00開演 ●バリオホール

日本作曲家協議会による出品13作が集う

# 邦楽器の祭典

パートII

主催 = 日本音楽集団  
現代邦楽協議会  
(社)日本作曲家協議会



## ごあいさつ

日本音楽集団の機関誌「邦楽現代24号」の特集では「わたしと邦楽作品」と題して6人の方々にそれぞれの思いを書いて頂きました。「邦楽器の祭典」への出品が契機となって、邦楽器や日本の伝統、西洋と日本、日本語などのことについて、それぞれの立場からあらためて思いを寄せられた文章を興味深く拝見しました。中でも西田由美子さんの13年間の西ドイツ生活を経て「言葉と音楽がこんなにも密接な関係があるのに驚いた」という報告には共感するものを覚えました。

願わくば、今後も出来るだけ多くの作曲家のみなさまと音楽の原点に立った討論や共同作業を展開したいものと考えます。

日本音楽集団 田村拓男

昨年の第1回は16曲の力作で、予想以上(?)の充実したコンサートだといわれました。企画に当たった人間としては四半世紀前頃を想って感無量でした。

今年は応募作の数が一コンサートに丁度ピタリで、全曲を上演できるのが何よりです。作曲家たちの創作意欲に叶い、日本音楽集団が演奏団体として新鮮な作品に出会いつづけることができるなら、こんなに嬉しいことはありません。

日本作曲家協議会副会長 三木 稔

企画・構成 = 三木 稔

実行委員 = 池辺晋一郎

北爪 道夫

長沢 勝俊

司会 = 山本直純



### 1. 村尾 幸映

零五九零 0590 —古都・奈良の調— (初演)

作品完成年月日'90年5月20日から四桁の数を取り曲名にしました。早春久しぶりに奈良を訪れた友人と公園を散策し着想した曲です。閑散とした東大寺の境内で、二、三頭のシカが寄って来たかと思うと一瞬の間に数が増え数十頭の群れとなり驚いている矢先、突然先頭が走り出すと同時に群れが「ダダダッ」と音を立てて去って行きました。朝、霧の中木々の間を壮観に駆け抜けるシカの力強さに感銘して書いた作品です。

[尺八] 藤崎重康

[二十絃箏] 花房はるえ・山田明美

[十七絃] 熊沢栄利子 [打楽器] 細谷一郎・臼杵美智代

### 2. 綿村 松輝

三本の尺八のための「破」「急」(初演)

前回の邦楽器の祭典(1989年)で初演されました三本の尺八のための「序」につぐ作品です。したがって「序」「破」「急」の三つの章によって一つの曲となるように作られています。三章の構成であることから、日本の音楽の重要な様式の一つである「序・破・急」をちょっと借用して曲名にいたしました。それぞれ独立して演奏されても良いように作られています。多彩な表現力をもつ尺八は、不思議に人の心の深層をゆり動かします。作品の中では、三本の尺八の織りなす線や響きが多様にかみ合いながら、心象を映しています。

[尺八] 竹井誠・水川寿也・添川浩史

### 3.西田由美子

化身 (初演)

私の中に化身という不思議なイメージに対する憧れがあり、日本のオトギ話よりヒントを得て、自分流にアレンジして作った物語を、尺八と箏により表現してみたくて書きました。尺八と箏の本来持つ美しい特色をこわす事なく、現代に生きる私の音の世界とうまくかみあわせる事に重点を置きました。テーマ、栄華、闘争、再生を示す化身の物語のあらすじについては、作品を聞いて下さる方々の豊富な想像力に委ねさせていただく事にします。

[尺八] 三橋貴風・米澤浩

[箏] 吉村七重・大島菜穂子 [十七絃] 宮越圭子

### 4.塚谷 晃弘

尺八・琴・打楽器のための「賦」(うた) (初演)

賦は本来はふとよむのだが、この曲の調子からいってうたとよぶことにした。

本来、賦というのは、感じたことをそのまま表わす漢詩で、各部分が対(ついで)をなし、句末には韻をふむという特色をもつ。この曲もまずそのような感觸で作曲され、尺八が主導的役割をつとめる。

[尺八] 藤崎重康

[箏] 花房はるえ

[打楽器] 望月太喜之丞

### 5.佐野 芳光

尺八・三味線・十七絃箏のための  
「ロックバラード」(初演)

“Rock-a-Ballade” for Shakuhachi,  
Shamisen and Koto (17-chord)

「ロックバラード」とは、ポピュラーミュージックでよく使用されるパターンのひとつで、3連系の2、4拍にアクセントを持つスローテンポの曲調のようですが、ここでは、もっと自由にワクを広げて、テンポもアップし、ロック風のドライブ感を含んだ曲調を指しています。

[尺八] 藤崎重康

[三味線] 野口美恵子

[十七絃] 大島菜穂子

### 6.上元 敏弘

風 紋 (初演)

草原に立った時、谷からはい上がる風。それは草をたなびかせ私の耳元をもすり抜けていく。私は子供の時から風にあこがれている。特に嵐の時の風の音は快感である。その風音そのものような楽器：尺八に以前から得体の知れない魅力を感じている。この息音を使って直接音楽を描いてみたいと前々から思っていた。今回はその希望が実現するのであるが、いざ音符を置いていくと自分の理想が風と共に去っていくようである。この理想と現実との溝を埋めようと努力して頂いているのが本日の四人の演奏家である。感謝いたします。

[尺八] 竹井誠・米澤浩・添川浩史

[十七絃] 宮越圭子

### 7.金田 潮兒

花片舞(はなびらまい)への前奏曲  
—三面の二十絃の為の— (初演)

この曲は曲名の通り昨年書いた「花片舞」—三面の二十絃箏の為の— への前奏曲として今年の5月に書きました。という訳で調絃は花片舞のそれと、ほぼ同じで3面とも一緒です。全体は大きく分けると8つの部分から成り、大体はcis、d、es、fis、g、as、hの7音階とcis、d、fis、g、hの5音階の部分から出来ています。第四部分とCodaには花片舞の主要素が使用されています。尚、花片舞は小金井公園や私の勤める東京学芸大学構内の桜が散る様—特に無情の雨風・嵐で乱れ散る、激しくも儂い花片舞を描いたものです。日本音楽集団の皆様の素晴らしい演奏を楽しみにしています。

[二十絃箏] 吉村七重・内藤洋子・熊沢栄利子

### 8.見目順一郎

竹 木—古心は椅子竹木なり  
三本の五孔尺八の為に (初演)

『正法眼蔵』『古仏心』の巻で「古心は椅子竹木なり」と言われているのは、心というものがとりたててあるのではなく、椅子竹木や牆壁瓦礫といったありのままの事物がそのまま心であるというほどの意味であると考えてよいだろう。とすれば、音楽はとりたててあるような心を表現しているのではなく、音楽は音楽でそのまま心、そして人も人である。人が音楽を聴くというのは、心が心を聴くということ。さらに聴くというの心。

[尺八] 竹井誠・米澤浩・添川浩史

### 9.柳田 孝義

二本の尺八と十七絃のための「綵」(あや)

この作品は横山勝也氏の高弟である古屋輝夫氏のリサイタルのために書いたもので、これ以前にも氏のためには『乗彼白雲』と題した二尺四寸のための独奏曲を書いている。この『綵』では、一尺八寸と二尺四寸の尺八に十七絃が参加している。

それぞれが響く瞬間の出会いのさまや、緯(よこ)に織り成して出来上がる紋様が自然のなかへ流れ込んでそしてまた立ち昇ってくる音の世界を観ること……そんな想いがこの『綵』と名づける動機となった。

[尺八] 三橋貴風・水川寿也

[十七絃] 宮越圭子

### 10.川崎絵都夫

阿修羅の如く(初演)

ある機会を得て戦闘の鬼神「阿修羅」に託したテーマを作りました。それらを元にして、阿修羅の悲しみ、阿修羅の悩み、戦闘に臨む阿修羅の三態を邦楽器で表現してみました。限られた時間の中での三態ですので阿修羅そのものではなく「阿修羅の如く」となる訳です。なおシンセサイザーは、(邦楽器に欠けている)低弦の持続音のシミュレーションとして使用しています。

[笛] 竹井誠 [尺八] 米澤浩・添川浩史

[三味線] 養田司郎 [琵琶] 坂田美子

[二十絃箏] 内藤洋子・佐藤里美

[打楽器] 尾崎太一・望月太喜之丞

[シンセサイザー] 川崎絵都夫 [指揮] 田村拓男

## 11.小橋 稔

双 双 (初演)

この曲は二人の管楽器と二人の打楽器の為の曲ですが従来の四重奏曲と異なり二人ずつの組み合わせが編成や構成などの中心なので双双と名付けました。

2と2の組み合わせだけが+でも×でも同じ答えになります。

一昨年9月4+7+4+7+4=26日の誕生日が4×7+4×7+4=60歳の還暦でした。

しとしちと しとしちとしと しぐれかな。

[尺八] 藤崎重康・水川寿也

[打楽器] 細谷一郎・白杵美智代

## 12.大政 直人

Evening Shadows (夕影) III (初演)

私がこの作品で意図したのは、まず自分が楽しめる曲を、という事である。普通クラシックの作曲法を勉強する場合、まず和声や対位法から始めるわけだが、自分自身を振り返ってみると、バッハやモーツァルトのすばらしさを理解して勉強したのではなく、やらざるを得ないから勉強した、というのが本音である。そして今、未知に近い領域である邦楽作品を書くにあたり、未熟な私であるが、とりあえず今思っている事を音にして、それを足掛りに、すばらしい伝統のある邦楽作品に対し理解を深め、よりよい作品を生み出したいと思っている。

[尺八] 三橋貴風・水川寿也

[二十絃箏] 吉村七重・内藤洋子

## 13.杉浦 正嘉

綾の扇(あやのおうぎ) (初演)

洛西高尾。新緑もいゝがやはりこゝは秋の紅葉がいい。陽をあびて紅葉は華やかに又一種の哀感をもって輝く。乱積のまがりくねった石段を登り山門に入る。そこの薬師像と五虚空蔵像は本来暗い堂内のかすかな光の中に魅惑的な姿で座す。山深い堂内の厳しい密教の護摩業。紅葉狩りの騒もこゝ迄はとどかない。この山と紅葉は恰も京染の裾模様様の華やかさと扇の舞のイメージと重なる。これを本調子の三味線と大小鼓とでまとめてみた。

[三味線] 太田幸子

[打楽器] 尾崎太一・望月太喜之丞

## 日本音楽集団からのお知らせ

- NHK FM「邦楽百番」(9月29日(土)朝8:00~9:00放送予定)に出演しています。「彫板(えりいた)」長沢勝俊作曲、「秋の曲」三木稔作曲、「阿吽」畦地慶司作曲、「史魂」杵屋正邦作曲の4曲を収録しました。
- 1990年度(第20回)モービル音楽賞邦楽部門に日本音楽集団が選ばれ11月28日に贈呈式があります。感謝!
- 11月6日(火)に行なわれる第116回定期(都市センターホール)では西村朗氏の新作「巫幻楽(ふげんらく)」を初演します。乞う、ご期待!
- 1991年1月26日~29日、第19次海外公演として香港アーツフェスティバルに出演することになりました。

# 箏

# 二十絃箏

箏を愛するすべての人の繊細な感情を忠実に音に表現するために、楽器の本質を追求した箏



オリジナル立奏台

日本音楽集団推薦

# 琴光堂和楽器店

東京都目黒区碑文谷2-19-15 TEL(792)8481 FAX(792)8437